



TITLE:

新設医学部赴任にさいして(随想)

AUTHOR(S):

竹内, 正文

---

CITATION:

竹内, 正文. 新設医学部赴任にさいして(随想). 泌尿器科紀要 1976, 22(1): 1-1

ISSUE DATE:

1976-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/121917>

RIGHT:

## 随 想

## 新設医学部赴任にさいして

竹 内 正 文\*

何カ月か前、次男（小学生）の父親参観ということで、日ごろ子供へのサービスの悪い父親の責任と、最終の教育にたづさわっている者から見た、現在のスタートの教育の実態に対する興味とから、参観後の先生との懇談まで残ってみた。先生側から、一人ずつ父親の子供に対する教育のあり方についての意見を聞かれているうちに、話は体罰の是非ということになった。最後に私の意見を求められた時、私は、最終課程の教育者として現在の学生をみた場合、スタートの教育に必要なのは、体罰の是非を論ずるよりも、知識の寡多よりも、昔風でいう“修身”と“体育”なのではなかろうか、と申し上げた。そのあとから子供が毎日、その先生の指導でサッカーをやり始め、宿題に追われてあおじろかった顔が、子供なりに精かんさを増した赤褐色に変って行くのを知り、シューズを買え、ユニフォームを買えという嬉しい負担に満足を感じているしだいである。

教育の難しさというのは、小学校から大学にいたるまで、それぞれ固有のものであろうが、医者となった暁に、病める人に対していかに対処すべきかという倫理は、おそらくスタートの教育の“修身”にその根をもつであらうし、病を癒すための active な研究と、とくに外科的な治療には、幼時より“体育”できたえ上げられた体力をその幹としなければならないような気がする。

阪大では、1968年頃より、卒後教育の方法として、非入局ローテートシステムがおこなわれ、年次ごとに、各科から出ているスタッフが研修委員として、多数の研修医側の諸君と話し合う会議がもたれ、私も、そのスタートの時より最後まで研修委員としてこれに参加した。なるほど元気はつらつ、意欲満々の研修医諸君も多いのであるが、おしなべてその発言は優等生的で、なよなよしており、昔多くの時間をスポーツに費やしたわれわれからみると、全く迫力にかけるとともに、

いわゆる先輩にあたる研修委員にこれから教えを乞うというのとはおおよそかけはなれた言葉をあびせることに、しばしば驚かされたものであった。現在の小学校の父親参観で、体罰を加えることがよいのであろうか、わるいのであろうかというような問題が discussion の対象となっているあいだは、まさしく片方で、学校での体操の時間がもったいないから塾へ通わせるという教育と相まって、「人間万事塞翁が馬」ということもあり人間の社会に、むしろ高等教育を受けたものに倫理の欠如と、ひ弱体質者が増加して行く傾向のあることはいなめない。

私が人を教えるという責任ある立場にたたされて、このような私なりの考えを書いているのは、実は卒後今日までの十数年間、臨床とくに手術のみに生きがいを感じて、あまりにも手術によって患者を癒すことの喜びにひたりすぎ、後輩の教育という点をおろそかにしていたのではないかという強い反省と、新しい大学医学部の教育者として、大きな希望に胸ふくらませてやってくる学生に対し、この期待を裏切るような教育者になりたくないという心よりの願いとから、むしろ自分に対する叱たであらうと思われる。

従来より医学部では、臨床と研究に対しては、ことのほか情熱を傾け、精力を費やすが、こと教育というと、みずからこれを不得意としがちであったし、私も全くこの例外ではなかった。各県一校の国立大医学部がつぎつぎ発足し、それぞれ新しいスタッフが選ばれて行っているが、これが県民の大きな期待の一つとなっている理由は、今の病いを新しい知識で癒してくれるということのみではなく、将来すぐれた医者を一人数でも多くつくってほしいという切実な願いである点をゆめゆめ忘れてはならないと考えている。このような点から私などにはとても荷が重過ぎるし、資格に欠けることは自他ともに認めるところであるが、なんとかこの期待を裏切らない努力を怠ってはならないと心あらたにしているしだいである。

\* 愛媛大学医学部教授（泌尿器科学）